

P-025

きょうだいのいる子育てへの支援
プログラムの検討

福井 聖子

NPO法人 はんもつく

【目的】当団体は医療の専門職と先輩ママが協働して、産後ケア事業、0～1歳児親子対象の集いの場や1～3歳児親子対象の親子遊びを行ってきた。これらの活動の際には、きょうだいに関する相談も多い。当市では第2子出産時の6割以上は里帰りをせず自宅に帰るが、2人の子育てを抱え込む例や育休中の父親が戸惑う例も認められる。第1子では初心者への支援の必要性が強く意識されているが、第2子出産後に生じる複数の子どもの養育という課題に対する支援プログラムは探した範囲では見当たらなかった。まず、課題の整理を行い、個々の課題への取組みの方法について検討する。**【方法】**今までの活動参加者のきょうだいに悩む相談やネット上のきょうだいの子育てに悩む声を集め、課題の分類を行なった。**【結果】**出産前では、急な出産時の預かり先や退院後など備えの体制に関する事・妊娠中に赤ちゃんがえりが始まる、母親の行動が制限され出かけられないなど上の子の問題・漠然とした産後の生活への不安・父親の家事育児力への不安などに要約される。第2子出産後は、産後回復しない体で上の子と新生児の世話をする心身への負担、赤ちゃんがえりや病気や発達、教育等の問題に十分対応できないなど上の子への対応、食事や園の送迎など生活の変化への対応、地域からの隔たり、子どもを比較してしまう/一人の子どもの時ほど十分構ってやれないなどの自責の念、父親や祖母の無理解などが挙げられた。**【考察】**核家族化が進み、乳児期の子育て経験のある保護者は非常に少なくなった。子どもが一人の時は集いの場などで地域とつながっていた保護者も、二人目出産後は出かけにくくなり、抱え込みがちである。新生児訪問や赤ちゃん訪問などで「二人目だったら大丈夫」と話を聞いてもらえたかった、「赤ちゃんより上の子どもを優先して見てあげて」と言われたが具体的にどうしていいかわからなかったという声もある。きょうだい関係は子どもの成長と共に解決する問題も多いことやきょうだいの年齢差や性別や性格によって困り事の内容がちがうこともあり、支援策が十分とは言い難い。課題を整理して、個々の家庭の状況に応じた子どものケアや生活の目標設定の立て方と今後の見通し、上の子どもへの関わり方の具体的なアドバイス、支援策の紹介、地域のつながり作りなど、支援のプログラムの充実を図りたい。

P-026

乳幼児を持つ母親のワーク・エンゲイジメントに関する要因の検討

関 美雪、柴田 亜希、伊草 綾香、
丹野 祐美、黒澤 恭子、菊池 宏、
石崎 順子

埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科

【目的】ワーク・エンゲイジメントは、メンタルヘルスとの関連が指摘されており、労働者の心の健康を図る指針の1つとなっている。第1子出産後の女性の就業継続率は増加傾向にあるものの、ストレスを抱える子育て中の女性労働者の増加が懸念されている。そこで、子育てをしながら働く女性のワーク・エンゲイジメントに関する要因を検討することを目的とする。**【方法】**インターネット調査会社にモニター登録している乳幼児を持つ母親100名を対象とした。属性、日本語版ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度（以下UWES-J）（9項目）、日本語版ワーク・ライフ・バランス尺度（以下SWING-J）（22項目）とした。研究の実施にあたり、所属大学の研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】乳幼児を持つ母親100名（核家族、常勤会社員）から回答を得た。平均年齢は、 31.8 ± 5.7 （23-46）歳、子どもの数は1人が59名、2人が31名、3人以上が10名であった。UWES-Jの得点の平均（標準偏差）は2.5（1.5）、中央値（Q1, Q3）は2.8（1.6, 3.2）、下位3尺度の平均（標準偏差）は、熟意2.8（1.6）、没頭2.4（1.5）、活力2.4（1.5）であった。SWING-Jの「仕事から家庭へ」「家庭から仕事へ」の2方向性にポジティブ、ネガティブを組み合わせた下位4尺度とUWES-Jの得点の相関係数は、「仕事から家庭へのポジティブ流出」「家庭から仕事へのポジティブ流出」の下位2尺度において、0.263, 0.342であり、いずれも正の相関が認められた（ $p < 0.01$ ）。「仕事から家庭へのネガティブ流出」「家庭から仕事へのネガティブ流出」の下位2尺度には、有意差はなかった。

【結論】本研究は、ワーク・エンゲイジメントとワーク・ライフ・バランスとの関連について検討した。その結果、仕事と家庭とが互いに良い影響を与え合うようなポジティブな感情は、ワーク・エンゲイジメントを高める要因となる可能性が示唆された。共働き世帯の増加により、「仕事も家庭も」いずれの役割も果たすことが一般的になりつつあることから、仕事と家庭が相互にポジティブな影響を与え合うような職場環境の整備が期待される。今後は、仕事と家庭の役割がそれぞれにどのように役立ち、影響を及ぼすのか検討したい。